

## 新刊ニュース

国井健宏 「ミサを祝う」—最後の晩餐から現在まで      オリエンズ宗教研究所

著者は御受難修道会の司祭にして、日本カトリック典礼委員会のメンバーでもある。ミサはカトリック信徒の生活の中心にあるものであり、生きた教会の宝である。この著書は大きく2部に分かれ、第一部：ミサの成り立ち、第二部：現代のミサ、となっている。

第一部ではミサというものの起源、形成期から成長、固定化、規則と儀式主義の時代から刷新の世紀までを論じる。そのなかでグレゴリオ聖歌のことにも言及される。

ミサは第二バチカン公会議により劇的な変化を遂げた。第二部ではそれを扱う。成立と伝統を踏まえた上で、必然であった刷新を述べる。著者は第二バチカン公会議の典礼改革を推し進めようとする立場である。公会議とその後を体験してきた著者による問題意識も詳細に論じられているので、第一部を踏まえたうえで読むべきものである。

J.Alain [L'Oeuvre d'orgue] vol. I~III      Barenreiter

ジャン・アランの全集がベーレンライターから刊行された。29歳の若さで亡くなったにもかかわらず120もの作品が残されている。音楽家の一族でもあるアラン家の協力もあり、アランの遺作は自筆楽譜をもとにすでに1943年にはパリのルデュック社から出版されはじめている。また、妹にあたるマリー・クレール・アランによるレジストレーションと注釈付きの楽譜も出版されている。彼女は、*Mon frere Jehan a disparu trop tot*(私の兄はあまりにも早く死んでしまった)と楽譜の注釈のなかで述べ、自筆楽譜を検証し、彼が生きていたらきつとこう解釈したに違いない、という家族としての確信をもって校訂楽譜を作った。自分のオルガニストのキャリアの最初からジャンの作品にかかわっていたという自負をこめて。しかし新たに発見された自筆譜、アラン未亡人所有の未検証の楽譜も含めて、音楽学者と演奏家との間の混乱もあり、ベーレンライター版に全集を委ねることになり、作品番号AWV(Alain Werke Verzeichnis)が付されたうえで今回の刊行となった。

楽譜序文と共に、豊富な自筆ファクシミリ、自筆の手紙、父親による自筆のアラン作品カタログ、サンジェルマン・アン・レイのアラン家のオルガンとそのストップの表、それを奏するアランの写真などを見ることができる。

杉本ゆり記